

幼稚園における子育て支援活動としての親子遊びの会

——「園長先生と遊ぼう」の実践から——

A Kindergarten-Based Parent-Child Playgroup supporting Childraising Skills:
Looking at the Implementation of “Let’s Play with the Kindergarten Principal!”

児童学科
Dept. of Child Studies

請川 滋大
Shigehiro Ukegawa

新山 裕之
Hiroyuki Arayama*
*港区立高輪幼稚園

抄 録 現在政府は、幼稚園においても子育て支援活動を行うよう園に要請している。そこには、保育の専門家としての幼稚園教諭が子どもと関わる姿を見せることで、保護者に子育てのコツを知ってもらいたいという目的がある。本研究では、幼稚園の園長先生が子育て支援活動としての親子遊びを行う様子を1年間記録した。幼稚園が、保護者に楽しんでもらいながら子どもとの関わり方のポイントを伝えたという実践記録である。活動はビデオカメラで記録し、その記録から園長先生が保護者にどのようなメッセージを伝えているかを分析した。園長先生は、子ども達が自然と出会うきっかけ、体を使って遊ぶことの楽しさ、幼稚園の周りにある文化資源について保護者に伝えていた。しかしそれは押しつけがましいものではなく、さりげないメッセージとして伝えられていたのであった。

キーワード：幼稚園、子育て支援、親子遊びの会、園長先生、保護者

Abstract The government is currently calling for activities that will support childraising to be carried out in kindergartens. One aim of this call is to provide an avenue whereby parents can learn some of the techniques of child care by observing kindergarten teachers, who are specialists in child care, as they interact with children. This research created a week-long record of kindergarten principals running parent-child play sessions designed to support the development of child-raising skills. For the kindergarten, this was a hands-on experience in getting the parents to enjoy themselves while the kindergarten staff communicated the nuts and bolts of interacting with children. These activities were recorded on video. Looking at the recordings, I analyzed the kinds of messages the principal communicated to the parents. In terms of content, the principal informed the parents about opportunities for the children to experience natural environments, the fun of physical play, and cultural resources that can be found in the vicinity of the kindergarten. These messages were delivered subtly, rather than in an overlearning way.

Keywords: Kindergarten, Activities to Sarprare Childraising Skills, Parent-Child Play, Kindergarten Principal, Parents

1. 問題と目的

1-1 問題

近年文部科学省は、幼稚園において預かり保育などを含めた子育て支援を行うよう求めている。これ

は、教育課程の時間以外での教育活動が保護者から求められているという現代のニーズを踏まえたものである。2008年に改訂された幼稚園教育要領では、第3章「指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」が新たに設

けられ、その第2に留意事項が記されている。ここでは「地域の実態」や「保護者の要請」により行う教育課程時間終了後の教育活動について、幼児の心身の負担に配慮することを求めた上で、5つのポイントが記されている。それらの要点をまとめて以下に記す(傍点は筆者)。

- (1) 幼児期にふさわしい無理のないものとする。教師と緊密な連携を図るようにする。
- (2) 家庭や地域での幼児の生活も考慮した上で計画を作成すること。地域の様々な資源を活用しつつ、多様な体験ができるようにすること。
- (3) 家庭との緊密な連携を図ること。情報交換の機会を設けたり、保護者が幼稚園と共に幼児を育てるという意識が高まるようにすること。
- (4) 地域の実態や保護者の事情、幼児の生活リズムを踏まえ弾力的な運用に配慮すること。
- (5) 幼稚園の教師の責任と指導の下に行うようにすること。

幼稚園入園前までは家庭で過ごす時間が長かったことを考慮に入れると、預かり保育など長時間に渡る教育活動を提供することは幼児にとって心身ともに負担になりかねない。そういった理由から、教育課程の時間の内容もきちんと踏まえた上で行うよう、預かり保育を担当する教師との連携について記しているわけである。また「地域の様々な資源を活用」することで、幼稚園だけに閉じた活動にすることなく、子どもたちが「多様な体験ができる」ような活動を提供することが望まれる旨も述べられている。しかしこれらを、実際に学級を担当している教師が実施しようとする、預かり保育を行うということは、相当な負担増ということになってしまう。

名須川・楠本(2011)は、幼稚園における子育て支援についての質問紙調査を2010年に全国の園を対象として行っている。質問紙では、子育て支援事業として①保育参観、②保育参加、③在園児の園庭開放、④未就園児の園庭開放、⑤子育て講演会等の啓発活動、⑥未就園児の行事への招待、⑦子育て相談、⑧子育て電話相談、⑨おやじの会を具体的にあげ、それらの活動を行っているかどうか調査した。その結果、⑧の電話相談を実施している園は1割台と少ないものの、①保育参観は9割ほど、②保育参加については最も多い国立園で84%、最も少ない私

立園でも56%が実施していることが判明した。これらの結果から、幼稚園における子育て支援事業は随分と一般化していることが分かる。しかし一方で、各園が子育て支援事業についての必要性を感じているものの、それと同時に負担も大きいと考えていることが自由記述の内容から明らかになっている。

実際に多くの園では、預かり保育の時間には教育課程を担当する者とは別の教師を当て、担任の負担感を低減するよう努めている。ただそこで課題になってくるのは、教育課程の教育と教育課程以降の預かり保育が全く別ものになってしまうという危うさを孕んでいるということだ。子どもたちにとってはその方が気持ちの切り替えもでき、かえってゆったりとした気分で過ごせるのかもしれない。しかし幼稚園側としては、園全体の教育活動として預かり保育を位置付けているのならば、その2つがまったく別なものになってしまうはいけないと考えるのが一般的である。できればこれら2つの教育活動を、何か良い形で連携させていきたい。ただ間違えてはいけないのは、預かり保育の時間を教育課程内の教育時間と同じようにもしくはその延長として実施すれば良い、というものではないということだ。もしそのように行えば、ただ単に子どもたちのこれまでの教育課程が時間的にも内容的にも延長されるだけであり、幼児期の子どもたちの生活には合わないものになってしまう。預かり保育を行うのであれば、教育課程の中で行われている教育活動とは異なる、もしくはやりにくい部分をうまく補うような形で実施できればより望ましいだろう。

恒岡(2012)は公立幼稚園の園長11人に対してヒアリングを行い、預かり保育についてどのように考えているか調査している。そこから2つのポイントを絞り込み筆者(恒岡)自身の考えを述べている。その2つとは「それぞれの地域の特性や保護者の願いなどを生かした教育活動」と、「幼児の健やかな成長につながる教育活動」であるが、最終的に次のような意見を述べつつ文章を結んでいる。それは「園長自身が預かり保育を教育活動としてどのように認識し、地域と結び付いた幼児期の教育のセンターとしての公立幼稚園の付加価値をどのように高めていくか」ということと、園長が「リーダーとして先頭に立って研究していく姿勢が期待される」ということだ。

今後新しいシステムの中で、公立にしる私立にし

る幼稚園でも長時間の教育・保育を行うことが求められることであろう。そのような時代において、教育課程以後の時間をいかに過ごすか、またいかに活用するかということは園のリーダーである園長が考えるべき重要な課題である。

1-2 目的

本研究では預かり保育の時間において行う活動の1つとして、また教育課程以後の時間に行う教育活動という意味から、港区立にじのはし幼稚園で2012年度に行われた「園長先生と遊ぼう」の活動を取り上げる^(註1)。普段の預かり保育は担任外の別な教師が担当している。しかしそれとは別に、1か月に1度、園長が預かり保育の時間を用いて子どもや保護者を対象に実践を行っている。幼稚園の代表としての園長が、子どもたちや保護者に伝えたいメッセージをそこから読み取れるのではないかと考えたのがこの研究対象を選んだ理由の1つである。「園長先生と遊ぼう」という教育活動の中で、園長が行ったことにはどのような意味があったのか、またどのようなメッセージを伝える役割を果たしていたのか。それらを目的意識にもちながら、ビデオ記録を分析することで考察を加えていくこととする。

1-3 「園長先生と遊ぼう」について

月に1度、保育時間が終了した後に園長自身が子どもたちや保護者と一緒に遊ぶというものである。共同執筆者である新山が港区立にじのはし幼稚園の園長時代に独自の企画として始めた。会の案内は、幼稚園の子どもたち全体や幼稚園の前にある掲示板にも張り紙を出して行っているが、利用者の多くは預かり保育（にこにこクラブ）を利用している子どもと幼稚園に通園している子とその保護者であった。預かり保育以外の子は、基本的に保護者と一緒に参加することとなっている。なお、参加する保護者は園児の弟や妹を連れてきても良いので、未就園児のための親子遊びの会のような役割も果たしている。

時間は保育終了後の午後2時から3時までの約1時間ほどであるが、その中にはラジオ体操を行ったり、隣にある小学校の校庭を走ったりと必ず1つは体を動かす内容が入っている。それは、高層マンションに住んでいて運動不足になりがちな台場の子どもたちに、少しでも体を動かす経験をして欲しいという園長自身の願いが込められている。

会の内容は、園長である新山が時期や季節に合ったものを毎回考え、事前に保護者に宛てて案内を出している。例を挙げると、4月の第1回目は「お台場探検隊」と名付け、隣接するお台場学園^(註2)の校舎内へ探検に出かけた。11月にはお台場海浜公園の砂浜周りを歩き、子どもたちと一緒に「どんぐり拾い」を行っている。これは、台場で拾ったどんぐりをたくさん集めて、拾ったどんぐりで遊べない福島の子どもたち（当時）に贈ろうという企画の一環であった。

園長がこの時間を担当することにはいくつか目的がある。1つは、幼稚園のある台場地区の自然環境を含め、周りの環境について子どもたちや保護者にもっと知ってもらいたいということであった。幼稚園の目の前にはお台場海浜公園があり、隣には広い芝生の区立レインボー公園がある。身近にこのような魅力的な環境があっても、あまり活用されていないのではないかという危惧がありこの企画を思い立った。さらに、幼稚園という職場には女性教員が多く野外の環境に目を向けそれを活用することに苦手意識のある者もいるため、すぐ近くにこれだけの自然があり子どもとの活動に使える場所があるのだということを、女性教員、とりわけ赴任して間もない若い教員にぜひ知ってもらいたいということもあった。いずれにしろ、身近な自然環境を保育に活かすということが大きなねらいとなっているという点で共通している。

3. 研究の方法

2012年4月から2013年の3月まで行われた活動をビデオカメラで記録した。8月は夏休みのため実施されなかったため、計11回実施されたこととなる。夏休み前の記録はSONYのDCR-DVD201（8cmのDVD-Rディスクを用いて録画を行う機材）を用いていたが、長い時間録画できないことと野外での音声クリアに撮れないという理由から、2学期からは同じくSONYのHDR-CX590（内臓ハードディスクに録画する機材）にワイヤレスマイク（ECM-HW2）を取り付け記録を行った。

会の参加者はその時々によって異なるが、おおむね20~30名の子どもたちとその保護者であった。保護者の参加は1回につき10名ほどである。その他、預かり保育を担当している教師が1名、また教育課程内の学級を担当する正規職員の教師も一緒に

参加することもあった。

4. 事例と考察

ここからは記録した中から事例を取り上げつつ、それぞれの行為にどのような意味があったのかを考察していきたい。事例は、子どもたちから見てどのような意味のある活動であったかという視点からいくつかのグループに分けている。なお、グループ名の後のカッコ内は幼稚園教育要領内での留意事項に示されている事項である。

4-1 身近にいる大人と出会う（「地域の様々な資源」, 「多様な体験」）

【事例4-1-1】副校長先生と出会う（2012/04/20）

小学校の校庭でラジオ体操をした後、子どもたちは園長先生を先頭にお台場学園に探検に出た。園長先生はアウトドア用のベストにリュックサックを背負い帽子をかぶっている。その姿はまさに探検隊のリーダーという感じである。小学校の玄関のところで、「これから学校に入るからね、あんまり大騒ぎしちゃダメですよ」と声をかける。子どもたちも、まだこの時は「知ってるもん」などと言いつつ通常の声で話をしてきた。しかし、校舎内に入って以降は園長先生が声のトーンを落として話をするので、子どもたちも普段とは違った雰囲気を感じ、大きな声を出さずにそっと歩きながら周りを興味深そうに見ていた。

図書室、パソコン室などを見学した後、学園の職員室手前までやってきた。ここでは「みんな、探検隊だっていうことを忘れないでね」と話し、いま一度子どもたちに周囲へ注意を払うよう声かけを行っていた。

左型の部屋から出てきた女性の先生が、「こんにちは」と子どもたちに声をかける。園長先生が、「こんにちは、探検隊です」とあいさつをする。次に右側から出てきた女性の先生が、子どもたちに向かって「こんにちは^①」と声をかけてくる。

園長：「こんにちはー。あ、こんにちは、だって。みんな何て言う？」

子どもたち：「こんにちはー」

園長：「こんにちは。副校長先生ですよ^②」

（副校長先生がにこやかな表情で子どもたちの顔を見渡す。子どもたちも普段見慣れない副校長先生

の顔を興味深そうに見ている）

「園長先生と遊ぼう」の初回の事例である。まだこの時は、子どもたちはこの活動がどういったことをするのかは具体的に分かっていない。しかし、普段はあまり一緒に遊ぶことのできない園長先生と関わられるのを楽しみにしている子どもたちも多いようだ。ラジオ体操をした後に学園まで周囲の植物を見ながら歩いてきたので、校舎に入る時点である程度体は温まっている。ここまでは「動」の場面である。その後、普段入ったことのない小・中学校の校舎に入ることに伴い、今度はあまり声を出さずに歩かなければいけない。ここは「静」の場面である。普段見たことのない大きなテーブルやパソコンの印刷機などを見て、子どもたちも物的な環境に興味津々の面持ちだ。そこで下線部①のように、知らない女性から声をかけられ、当初は少し驚いた様子を見せていた。しかし、園長先生が「こんにちは」と挨拶し、下線部②「副校長先生ですよ」と教えてくれたので、また安心した雰囲気に戻っている。

この副校長先生との出会いは偶然ではなく、事前に園長が学園へ赴き、「あとで子どもたちと一緒に探検に来るので、子どもたちに声をかけてあげてください」と依頼をしていたためである。このような事前準備をしておき、子どもたちと普段接することのない大人（副校長先生）とを意図的に出会わせていたのであった。学園の校長先生が幼稚園に顔を見せることはまれにあるが、副校長先生の顔を見ることはあまりない。副校長というのがどういう立場の人か分からなくても、自分たちが将来進学する学校に顔見知りができたとすることは子どもたちにとって大きな経験となったであろう。

【事例4-1-2】用務主事のNさんと一緒に遊ぶ

(2013/1/22)

天気は良いが気温の低い日である。いつものように校庭でラジオ体操をした後、「今日はこんなことをして遊びます」と園長先生がクルクルと回って見せる。子どもの中には「コマ！」と言う者もあり、次に何をするか、すでに気付いたようである。

普段、預かり保育を行っているこにこの部屋（注3）へ移動すると、そこにはたくさんのコマが用意されている。種類も様々である。子どもたちはさっそくコマのところへ行き、それぞれにコマを回

そうとするが、上手に回せる子とそうでない子がいるようだ。「どうやって回すの?」とさっそく園長先生の所へ聞きに来る子がいたり、「園長先生、回った〜」と声をかけてくる子もいる。

園長：「あのね、Nさんはね、自分で新しいコマを作ったんだよ^①」

(子どもたちの視線がNさんの方へ向く)

Nさん：(数人の子どもたちの隣で変わったコマを回している)

(園長先生の周りにいた子どもたちがNさんの方へ近付いていく)

園長：「Nさんがね、音のするコマを回すって。見ててごらん^②」

Nさん：「これね、ブーンっていう音するからね、いいちょっとどいて」

園長：「真ん中でやってくれるって^③」

Nさん：「いいかい、おーきれい」(コマが回ることによってペイントしている色がきれいに見える)

園長：「静かに、静かに」(子どもたち、静かにコマを見る)

女児A：「ポーッってなってる」

Nさん：「ほら」

女児B：「きれい」(周りの子も「きれい」「きれい」と言い始める)

本園で用務主事を務めているNさんは、2011年の震災後、福島県から東京に避難してきた。子どもたちにとってはおじいちゃんと同じくらいの年齢の男性である。Nさんは、子どもの頃からよく自分でおもちゃを作って遊んでいたようで、今でも器用に何でも作ってしまう。6月に行った竹とんぼの会の時には、自分が作った竹とんぼを持って参加してくれた。これらの参加は、園長がNさんに声をかけ実現したものである。普段から園内の環境整備をしているので、子どもたちの目には触れているNさんであるが、いつもだとそれほど深く関わることはない。少し声をかけたり、かけられたりする程度の関係である。大勢の子どもたちの前で話をするのはそれほど得意ではないのだろうが、園長がその部分を補いつつ、Nさんの方にスポットライトを当てようとしているのが下線部①、②、③から分かる。幼児と話すのは得意でなくても、コマを回すのは得意なのでその技に子どもたちの目は引きつけられている。

このようにNさんにも「園長と遊ぼう」の会に参加してもらうことによって、今までは子どもたちにとって、「幼稚園で見かけるおじさん」だったのが、こういった遊びを通して「何でも作れるすごいおじさん」に変貌することだろう。

コマそのものは教育課程の中でも取り組む一般的な遊びであるが、そのコマがとても上手なNさんと出会ったことで、当たり前前の体験が当たり前なものではなく、子どもたちにとって特別な体験となっていた。それはNさんのコマを回す技術と、Nさんが自作した普段は見たことのないような多くの変わりゴマを持ってきてくれたことによるものである。「地域の様々な資源」には、園外だけではなく、より身近な、しかし普段はあまり触れることのない人やモノといったものも含まれるだろう。

4-2 身近な自然に気付く(「家庭や地域での生活を考慮」,「地域の様々な資源」)

【事例4-2-1】フウ(楓)の木と実を知る

(2012/12/10)

12月になり、天気は良くても気温はずいぶんと低くなってきている。海に近いにじのはし幼稚園には、海側からの冷たい風が吹いている。校庭でラジオ体操をした後、周囲にある木を見ながら子どもたちや保護者と共に歩き始める。周囲の木々はまだ紅葉の色を湛えている。

園長：「あそこに実がなってるの、分かる?^①」

(10メートル以上ある大きな木を指しながら)

子どもたち：「分かるー」

園長：「見える?」

子どもたち：「うん」「見えるー」など

園長：「ほら」

子どもたち：「あ、あった」「あっちにもー」など

園長：「見える?トゲトゲのが^②」

子どもたち：「見える、あそこにも」「トゲトゲのもの」

園長：「ね。これはね、フウの木というやつです。

フウの木。アメリカフウとかモミジバフウとか。あの、池袋にある芸術劇場の隣辺りにたくさんあるんですけど。あの、なんだっけな、スズカケの木と近いかな、種類としてはね^③」

体操後、目線が下の方へ向きながら歩いている子どもたちに対して、園長は高い木を見ながら下線部①のように話しかけている。この声かけで、子どもたちの目線は一気に高いところへと移動した。最初の発問で前にいる子どもたちは「分かる」と答えているのだが、まだこの問いは全員に共有されていないと感じたのか、園長は何度か同じように「見える？」と声をかけている。そのことにより、後ろの方にいた子どもたちも皆、高い木の方に目線を向けるようになった。この辺の注意の引き方は、長年子どもたちと関わってきた経験により培われたものである。

最終的に保護者も含め全員が大きな木に注目するようになったのを見計らって、下線部③の説明をしている。これは子どもたちに向けての説明ではなく、保護者に対する説明である。なぜなら、目線が保護者の方を向いているからだ。子どもに対しては木の名前を知ってもらいたいわけではなく、下線部②にあるように木の葉の特徴や、またはこういった大きな木が幼稚園のすぐ近くにあるということ、つまり周りの自然環境に「気付く」ということを意識しての言葉かけである。一方、保護者に対しては大きな木の名前やその仲間、さらには同じ木がたくさん植えられている場所についても触れ、詳しい情報を提供している。そこには、今度子どもと一緒にどこかへ行った時に、「この前、幼稚園で同じ木を見たね」というように親子で話題にしてもらいたいという願いが込められている。園長はインフォーマルな聞き取りの中で、「お台場には意外とたくさんの自然があるのに、若いお母さんたちは気付いていないことも多いんです」と語っていたことがあった。管理職として勤める以前からにじのはし幼稚園に勤務している新山としては、幼稚園の周りがある自然に少しでも興味をもってもらえたらという思いがある。その思いが、こういった植物の詳しい説明として現れたのである。

文部科学省による「幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集」(2009)には、「幼稚園における子育て支援の基本的な考え方」として5つの項目が示されているが、そのうちの1つに次のようなことが記されている。

幼稚園は保護者の子育てに対する意欲を引き出し、その教育力が向上するよう、「親と子が共に育

つ」という観点から子育て支援を実施し、子どものよりよい育ちが実現するようにすることが大切である

自然はいくら周りに存在していても、それに気付かなければ単なる風景として捉えられがちである。今回、こういった大きな木の存在や変わった葉に気付くことで、親も子も共に新たな育ちのきっかけを得たのではないだろうか。次の事例も同じく台場にある自然についてのものである。

【事例 4-2-2】お台場のカブトムシ (2012/12/10)

事例 4-2-1 の続き。フウの木から 30 メートルほど歩いてきたところで、この後の活動について説明をする。最終的な目標はお台場学園の屋上にあるガーデンである。

園長：「今日はね、あとで屋上まで行くけど、屋上に行く前にぐるっと、この学校の外の周りをぐるっと一周してみます」

男児 A：「ちょっと暗くなってるところも？」

園長：「そう。それでね、お母さんたちにもお知らせしますが、みんなも知っててね。ここは、学校が出来てから 17 年目だけ。こないだ誕生会やったよね。ここを作る時には山の土を持ってきているので、(低い木のところまで行き触れながら)これ、トゲトゲがある。タラの木です。タラの芽って 2 月とか 3 月とか、旬の頃に天ぷらにするとおいしいタラの木があるの。この辺です」

(子どもたち、保護者ともに木の方へ近付く)

園長：「それで、お台場ができた次の年の夏にカブトムシがあちこちで発生したんです。お台場でカブトムシってどういうことって話題になったんですけど、山の土を持ってきたので、その土の中にサナギの状態でしたという。そういうことです。さっきのフウの木もそうですけど、ここには実のなる木がたくさんあります。これはなんだっけな、ヤマモモかな。これから行く間に実のなる木があるかもしれないから、よく見てね、あ、実がなった木があったよって教えてください。友達にも教えてください。その他にもなにか面白いものを発見したら教

えてね、いい?」

ここでも保護者や子どもたちに対して、お台場の自然について一般にはあまり知られていない話題を提供している。周知のとおり、台場は江戸末期、ペリーが来航した折に外国船から江戸を守るために作られた砲台を備えるための埋め立て地である。しかし長年、品川方面からは船で渡ることしかできず、商業地や住宅地としてその開発が加速化したのは1993年に東京港連絡橋（レインボーブリッジ）完成後のことである。レインボーブリッジのたもとにあるにじのはし幼稚園や港陽小学校・港陽中学校（お台場学園）は、それから3年後の1996年の開園（開校）である。住宅地としては新しいこの土地には、古くからの神社やお寺などがなく、橋を渡った品川や高輪などとは異なった雰囲気をもつ新しい街である。そういった新しい街にも歴史や自然にまつわる逸話があり、それを子どもたちや保護者に知ってもらいたいというのが園長の願いである。こういった語りが長年積み重ねられていくことで、その土地の歴史となっていくのであろう。

4-3 身体を使って遊ぶ（「家庭や地域での生活を考慮」、「多様な体験」）

【事例 4-3-1】大きな階段を一步步上がる

(2012/4/20)

お台場学園の中に入り、階段を上る場面。幼稚園の階段と違い、学校の階段はステップも大きい。

園長：「階段のぼる時、みんな足は強いですか？」
子どもたち：「はい」

園長：「強い？じゃあ友達と手を離して、階段をね、こうやって（手でステップを1段ずつ上がる様子を示しながら）上がってごらん。1コ、1コ、1コじゃなくて、しっかり上がってごらん。（手すりに）掴まらなくて行ける子は掴まらないで行ってごらん。探検隊がこんな風になって歩いてたらカッコ悪いから」

男児A：「掴まらな—い」

（それまでは手を繋いで歩いてきた子どもたちだったが、階段では手を離し、ほとんどの子が手すりにも掴まらずに一步步階段を上がっていった）

何気ない日常的な場面であるが、にじのはし幼稚園は平屋建てなので普段子どもたちが階段を上ることはない。また、子どもたちが住んでいる自宅は台場にあるマンションがほとんどなので、多くの子は日常的にエレベーターを使っていることが多い。そのように考えると、すべり台などで遊ばない限り、この地域に住む子どもにとって階段はそれほど日常的なものではないということだ。子どもたちは、いつもならば、一步步足を揃えながら階段を上っているのかもしれないが、この時は足を揃えないで一步步ステップを進めながら上っていた。こういうごく当たり前のような活動の中にも、普段よりも「身体を動かす」という要素を含めている。ラジオ体操を毎回行うのも同じような理由で、それは日頃室内で運動不足になり気味の子どもたち、そして保護者にもちょっとした運動を経験してもらいたいということからきている。もしかすると、幼稚園でたくさん遊んでいる子どもたちよりも、家庭で過ごしている専業主婦の母親の方が運動量は少ないのかもしれない。夏の朝の代名詞である公園でのラジオ体操も、この台場地区ではこれまで開催されたことがなかった^(註4)。日頃の運動不足を補うためにも、こういった動きを取り入れている。

【事例 4-3-2】かっこよく走る方法（2012/10/29）

この日は幼稚園の隣にあるレインボー公園で行った。公園でラジオを体操をした後、「今日はリレーをやる前に走ろうと思ってこれを持ってきました」と道具箱から新聞を取り出す。「え、走ろうと思って新聞ってどういうこと？」と問いかけると、「読む」「読みながら走る—」などと答えが返ってくる。一度、園長自身が新聞紙を体の前につけ、落とさないように走る見本を示すが、詳しいことはここでは説明しない。

園長：「今日ね、こうやるとね楽に、かっこよく走れるってやり方をみんなに教えてあげるから。ちょっとやってみようか。ちょっと立ってごらん、お母さんたちもやってみましょう」

（子どもたち、保護者共に立ち上がる）

園長：「走る時にね、手をこうやって走ると（手をまっすぐに伸ばしたまま）、こうやって走ると（腕を曲げ手を軽く握る）どっ

ちが楽かな？」

(子どもたちと一緒にその場で腕を振ってみる)

園長：「手を曲げないで、まっすぐにしてやってみて。今度、手を曲げてやってみて」

(周囲を走り始める子もいる)

園長：「ひじを曲げてこうやって(曲げた状態を見せて)走る。ひじ、伸ばしたままだと走れないからね。手はそれが1つのコツ」

(その後、つま先を上手に使う足の運び方についても説明をする)

事例のこの部分だけでは園長が子どもたちに走り方を教えることばかりが目立ち、子ども主体の活動になっていない印象を受けるが、その後新聞紙を使って走ったり、ボールを互いに投げ合うというような活動を取り入れている。この走り方を教える活動を取り入れたのには2つの背景がある。1つには台場という地域の特性である。この地区には高層マンションが立ち並び、多くの子どもはマンションの高層階に居住している。そのためスポーツクラブにでも入っていない限り、一度自宅に戻ると広々とした環境を使って体を動かすという経験は少なくなってしまう。もちろん意識して外へ遊びに連れ出そうとする保護者もいるであろうが、そういった親ばかりでもない。園長としては、昨今日本の子どもたち全体においても課題となっている「体を使って遊ぶことの少なさ」ということに課題意識をもっている。そのため、毎回行うラジオ体操もそうであるが、少しでも体を動かす経験を積むことで、遊びとして楽しみながら体を動かすように努めている。

もう1つの背景には、他の園と同様、こちらの園も女性教師がほとんどで男性教師が少ないということがあげられる。当該年度で言えば男性教師は園長ただ一人である。そういった状況を踏まえ、女性教師とは違った経験をこの時間で提供できないかと考えている。その1つがこの日の活動のように、ダイナミックに体を使って遊ぶということである。この日は活動のすべての時間、つまり約1時間ずっとレインボー公園にいたのだが、思い切り走ったり思い切りボールを投げたりと体を思い切り使って遊ぶ活動が多かった。もちろん、参加している保護者も一緒にそれらの活動を行った。保護者らは、身の回りにある道具(新聞、柔らかいボールなど)を使うだけでも、「これだけ体を使って遊ぶことができるん

ですよ」というメッセージを受け取ることができたであろう。

5. 全体考察

荒牧(2009)は、子育て支援を2つのタイプに分けている。1つは、保護者から子どもを引き受けたり保護者の相談に乗ったりするという「代替型・授受型の支援」である。もう一方は、園庭を開放したり保護者を招いて親子での活動を実施する「参加型・協同型の支援」である。荒牧は後者の「参加型・協同型の支援」が、子育て支援の中でも「親と子が共に育つ」という理由から重要であると述べている。

幼稚園における預かり保育が一般的になったことで、保護者は預かり保育のない幼稚園を選ばなくなってきたという。いまから5年ほど前、ある私立幼稚園で聞き取りをした時のことであるが、その園では預かり保育を実施しているが実際に利用する人はまだ少ないという話であった。預かり保育のための教師を別に雇っている園側としては、預かりだけを考えると経営的に赤字になってしまうので、本当ならば「やめてしまいたい」とも話していた。しかしそうすると、入園希望者が減る可能性があり、預かり保育をやめることもできないということであった。想像するに、いまは預かりの利用者も増え、やめたいという状況ではなくなっているだろう。だが、荒牧のいう代替型・授受型の支援を幼稚園側が手厚くすることで、保護者は子どもを預けるということを当たり前のこととして捉え、共に育てるという気持ちが少しずつ減っていくことも懸念される。学校としての幼稚園が提供する教育活動を、保護者がお金を支払って享受する「サービス」として捉えることで、少しでも手厚いサービスのある方に流れるという現状をくい止めることは難しいだろう。それは保護者として当たり前のことなのかもしれない。ただ、幼児の教育は幼稚園などの就学前の教育機関のみで行うのではなく、保護者も一緒になって行うのだという基本的な前提に立ち返れば、預かり保育の時間の中で「参加型・協同型の支援」を園長自らが行う「園長先生と遊ぼう」という活動は、現在の「代替型・授受型の支援」である預かり保育に一石を投じることになるだろう。また、幼稚園の教育活動全体を見渡している園長だからこそ、教育課程で不足した部分をわずかながらでも補うということが

できるはずである。

ここまで園長が行う預かり保育内での活動について言及してきたが、実際にこれらを実施する上で大きな障壁となるのは園長自身が他の教師と同様に非常に多忙であるという事である。今回の実践については1か月に1度の活動という事で辛うじて実施できているが、もしこれが週に1度、もしくはそれ以上ということになれば活動は滞ってしまう。園長としての業務は多岐に渡るため、これらを副園長や教頭、主任などとうまく分担しながら進めていくことが望まれるが、分担を願いたいそれらの教師も共に忙しい状況にある。幼稚園全体の仕事、とりわけ事務作業を軽減できれば、多くの教師が子どもと触れ合える時間は増えるだろう。しかしこれらは、各園ごとの取り組みだけでは乗り越えることの難しい課題でもある。

最後に本研究の課題について述べ、本論のまとめとしたい。この「園長先生と遊ぼう」は観察者である請川が、実践者である新山の姿を中心にビデオカメラを用いながら記録を撮っていた。前半はマイクを付けずにビデオ撮影を行ったため、屋外での場面、特に風の強い日や全体像を収めるために少し離れた所から撮影した際には、実践者の声がうまく記録できなかったことがある。後半にワイヤレスマイクを用いるようにしてからは、それらの課題をずいぶん乗り越えることはできるようになったが、その場合でも技術的な問題（電池の残量や無線の接続状況）に常に気を払っていなければならない。そういった技術的な課題も今後クリアしていく必要がある。また、今回は園長と子どもに視点を当てて記録を撮っていたため、保護者に話を聞くことはしなかった。ビデオには保護者の姿も映っているが、利用している当事者としての気持ちを聞くことをしなかったのは今となっては残念なことであった。保護者がこのような活動に参加して気持ちにどのような

変化が表れたのか、その点を知ることが課題として残った。

【注】

- (注1) 当時は共同執筆者の1人である新山が港区立にじのはし幼稚園長を務めていた。
- (注2) 港区立港陽小学校と港陽中学校は小学校・中学校の一貫教育校であり、正式に「港区立小中一貫教育校 お台場学園」と名付けられている。港区立にじのはし幼稚園とは隣り合っている。
- (注3) にこにこクラブを行っている部屋は、普段「みんなの部屋」と呼ばれており、一般的な幼稚園のホールと同じ役割をしている。
- (注4) お台場学園が発行している学校便り「お台場学園だより」(平成26年7月号)によれば、昨年(2013年)の夏、「お台場の街ができて18年目にして初めて」ラジオ体操の会が開催された。

【引用文献】

- 荒牧美佐子 2009 幼稚園児をもつ母親の育児感情と子育て支援 発達 120 pp.29-36
- 恒岡宗司 2012 公立幼稚園における「預かり保育」に関する一考察－「預かり保育」に関する公立幼稚園長への意識調査から－ 奈良文化女子短期大学紀要 43 pp.97-113
- 名須川知子・楠本洋子 2011 幼稚園における子育て支援に関する研究－全国調査を中心に－ 兵庫教育大学研究紀要 39 pp.27-33
- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 文部科学省 2009 幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集